『人文社会論叢』人文科学篇26, 2011, pp. 25-48.

敦煌出土のウイグル語暦占文書
――通書『玉匣記』との關連を中心に――

松　井　　太

１．はじめに

中央アジア地域の諸遺跡から出土した古ウイグル語文獻中には，卜占・暦占關係の文書が少なからず存在する。それらは，佛教やインド天文學，道教や中國地域の民間信仰，あるいはそれらを混淆させた内容を持つ。Annemarie von Gabain により校訂された『易經』のウイグル語譯本［TT I］，また Reşid Rahmeti Arat（ただし Gabdul Rašid Rachmati 名義）により研究された暦占文書斷片群［TT VII］は，その代表的な例といえる。さらに近年では，Peter Zieme が呪術的内容をもつ佛教寫本を集成し［BT XXIII］，また Lilija Tugusheva もロシア・サンクトペテルブルク所藏の斷片２點を公刊した［Tugusheva 2007］。これらの占術關係文書はいずれも古ウイグル族の宗教生活・精神生活をうかがう上での重要な資料となり得る。ただし，上記の諸研究で扱われた資料は，いずれも，新疆トゥルファン（吐魯番）地域から將來されたものであった。

一方，中國甘肅省の佛教聖地である敦煌莫高窟とその周邊から將來された古ウイグル語文獻群の中にも，やはり暦占に關係するものが存在する。そこで本稿では，若干の敦煌出土のウイグル語暦占關係文書斷片を校訂して，トゥルファン地域發現資料群との將來的な比較檢討の材料を提供することとしたい。

２．資料

本稿で扱う資料は下記の４點である：**Text A** = B165:3；**Text B** = Peald 6e + B157:54-2；**Text C** = Peald 6h；**Text D** = Peald 6c。**Text A** および Text B の一部（B157:54-2）は，1988 年から1995 年にわたる敦煌莫高窟北區石窟の發掘調査で將來されたものであり，現在は莫高窟に隣接する莫高窟敦煌研究院に所藏されている。一方, Text B, C, D は, いずれも米國プリンストン大學東アジア圖書館（East Asian Library of Princeton University）所藏の敦煌文書コレクションに屬する[1]。

[1] これらの３斷片の所藏記號中の Peald とは “Princeton, East Asian Library, Dunhuang” の頭文字をとったものである。なお, 本稿で對象とする資料を含め, プリンストン大學東アジア圖書館所藏の古ウイグル語文獻については, アメリカのウイグル學者 Kahar Barat 氏が，2002 年 9 月に開催された國際學會 “Turfan Revisited” で紹介したことを付言しておく［松井太・山部能宜「國際學會 トゥルファン再訪――シルクロード美術・文化研究の第１世紀」『東方學』106, 2003, p. 174］。ただし，同氏は學會の報告論文集（*Turfan Revisited*, ed. by Desmond Durkin-Meisterernst et al., 2004, Berlin）に寄稿せず，また管見の限りでは，現在に至るまでプリンストン大學所藏資料

論文31

注目すべきは，Text B, C, D が，いずれも西夏語印刷佛典の紙背を再利用して記されたものである點である。荒川愼太郎（東京外國語大學）氏によれば，この西夏語佛典の内容は『阿毘達磨大毘婆沙論』（『大正藏』巻27, No. 1545）に相當する。料紙の特徴に鑑みれば，この３斷片が本來は同一の刊本に屬することは確實である。刊本に使用されている料紙は，漉き縞のない中上質で，紙色は Beige clâir ~ Beige である[2]。

Text B, C, D は，それ自體が斷片的ではあるが，寫眞複製からも明らかなように，實際にはさらに小さな２～３點の斷片を（ときには上下逆に）連貼して構成されている。以下に掲げるテキスト校訂では，それらの小斷片を (a), (b) などとして表示した。ウイグル字の筆跡や行間・行配置からは，Text B (a) と Text C (a) が本來は同一の寫本に屬し，また Texts B (b), C (b) および Text D は別の寫本に屬した可能性が高い【補註】。また，Texts B ~ D はいずれも，おそらく別の巻子本を補強する裏貼りとして再々利用されており，それゆえウイグル文テキストには剥離の際に欠損した箇所もある。

３．ウイグル文テキストと通書『玉匣記』

次節に提示する校訂テキストおよび譯註の諸處で言及されるように，Texts A, B の内容と構成は，中華地域で普及した通書『玉匣記』とおおむね一致する内容をもつ。また，Texts C, D にも，やはり『玉匣記』と部分的に一致する内容がみられる。

「通書（通勝）」とは，日の吉凶をはじめとする簡便な占術を中心として日常生活上の情報や百科知識を掲載した冊子をさし，その中でも民衆の間でもっとも普及していた出版物の一つが『玉匣記』である。『玉匣記』は，現代に至るまでなお，中國・臺湾の各地で刊行されており，また民間の需要に從って編纂・刊行されていることから，その内容も版本により異同が少なくない。

『玉匣記』諸本について檢討を加えた三浦國雄に從えば，各種刊本の内容は，おおむね，①「諸神聖誕令節日期」(當時, 民間で信仰されていた諸神佛の誕生日のカレンダー)，②「許眞君玉匣記」(晉・許遜の編纂に仮託される，狭義の『玉匣記』)，③「法師選擇記」(唐・玄奘三藏が太宗李世民に獻上したとされる)，④「吉凶日選擇集」（雜多な擇吉記事）の４部分から構成される。確認される限りでは，最古の『玉匣記』は，明・宣德八年（1433）四月付けの「耕筆齋呉子」なる人物による序文を有する『續道藏』(1607年刊) 収録版である［三浦 2002, pp. 8-12］。

についての研究成果を論文として公表していない。しかしこの間，プリンストン大學所藏資料は，大英圖書館の International Dunhuang Project（http://idp.bl.uk）のデータベース上でカラー畫像が公開され，研究者が自由に利用できる環境が整えられるに至っている。筆者が Kahar Barat 氏に先んじて本稿を著すのは，このような研究環境の変化に鑑みたものである。プリンストン大學所藏のウイグル語文獻總體についての Kahar Barat 氏の研究成果が，いずれ公表されることを鶴首する。

[2] これら３斷片以外に，プリンストン大學所藏資料中には，さらに３點の西夏語・ウイグル語兩語斷片が含まれており（Peald 6d, Peald 6f, Peald 6i），そのいずれも複數の小斷片を連貼したものである。荒川愼太郎氏の比定によれば，これら３點の西夏文の内容も『阿毘達磨大毘婆沙論』に相當し，Texts B, C, D と同じ西夏語佛典版本からの離れであることは確實である。

論文31

明代より古い時期に，このような一般的構成をもつ『玉匣記』が存在し出版されたという物的證據は，これまで知られていない。一方，本稿で扱うウイグル語資料は，草書體その他の特徴や，また西夏語印刷佛典を再利用しているという點からみて，13 〜 14世紀のモンゴル帝國時代に屬するとみて誤りない。さらに，サンクトペテルブルク東洋文獻研究所所藏のハラホト（Qara-Qota）出土モンゴル語曆占寫本の冊子本（SI G 105）も『玉匣記』と同一の内容を含んでおり，その原典は明らかにウイグル語であった[3]。これらのウイグル語・モンゴル語の曆占書寫本斷片群は，『玉匣記』もしくはそれと共通する内容をもつ漢語の曆占書がモンゴル時代に存在し，ウイグル人・モンゴル人の間にも普及していたという狀況を推測させる。

この點に關連して注目されるのは，宋代の江西地域で，『玉匣記』諸寫本にその名を冠される許遜に對する信仰が高まっていたことである。そのことは，宋の徽宗が彼に「神功妙濟眞君」の號を與え（1112年），また宰相王安石や曾鞏らの文人が許遜を記念する碑文を執筆する，といった事實により裏付けられる［秋月 1978, pp. 5, 126-130］。モンゴル帝國が南宋を征服した後にも，許遜に對する信仰は，劉玉 (1257–1310) と黃元吉 (1271?–1325) により發展させられ，許遜を創始者として稱揚する新道教としての淨明道が成立する［秋月 1978, pp. 142-146］。そして，モンゴル支配下で淨明道はさらなる發展をみた。例えば，元貞元年（1295）にモンゴル皇帝の成宗テムル（Temür, 位1294-1307）は許遜を「至道玄應神功妙濟眞君」に加封しており［秋月 1978, p. 37］，また延祐二年（1316）に仁宗アユルバルワダ（Ayurbarwada, 位1311-1320）は淨明道の本山である玉隆萬壽宮の重修のために内帑金を下賜している［秋月 1978, p. 83］。さらに，1327年に刊行された淨明道の聖典『淨明忠孝全書』には，張珪・趙世延・虞集・滕賓・曾巽申といった元廷の文人官僚が序文を寄稿している［秋月 1978, pp. 148-155］。

現存の『玉匣記』と淨明道との關係は，いまだに十分には解明されていない［三浦 2002, p. 9］。とはいえ，宋代からモンゴル時代にかけての中華地域における淨明道の發展が，おそらくは雜多な民間信仰の要素をも採り入れつつ，現存の『玉匣記』に類する曆占書・通書を成立させ，それが上述した敦煌・ハラホト出土のウイグル語・モンゴル語曆占書の原典となった可能性は決して低くないと，筆者は考える。遺憾ながら，筆者は宋元時代の道教史・道教文獻には通曉しないので，これらのウイグル語・モンゴル語曆占書の原典の問題については，專家の示教を俟つこととしたい。

同樣に，中國地域の佛教・道教さらには民間信仰に由來する要素を多く含むウイグル語・モンゴル語文獻の例としては，『佛説北斗七星延命經』（『大正藏』卷21, No. 1307）が擧げられる。これは中

[3] この點は，2000 年度日本モンゴル學會秋季大會での研究報告において指摘した（要旨：『日本モンゴル學會紀要』31, 2001, p. 173）。當該寫本の實見調査に際し，多岐に亘って便宜を圖って下さった Vladimir Uspensky 教授に深甚の謝意を表わす。また，このモンゴル語冊子本は，2008 年 12 月から 2009 年 8 月までエルミタージュ博物館と京都國立博物館で開催された展覽會で一般に展示され，その展覽會カタログにも２頁分の寫眞複製が掲載された［*Peshchery tysjachi budd*, St. Petersburg, 2008, p. 394;『シルクロード 文字を辿って：ロシア探檢隊収集の文物』京都國立博物館，2009, p. 172］。その２頁にみえる圓形の表の内容は，それぞれ『玉匣記』「諸葛先生萬年出行圖」中の「中元將軍所管吉凶之圖」と「下元將軍所管吉凶之圖」に對應する。

論文31

華地域で成立した僞經であり，佛教に仮託しながらも道教や民間信仰に由來する要素を多々含んでいる［TT VII, Nrn. 14, 40; BT XXIII, Text G; Franke 1990］。この僞經は皇慶二年（1313）にウイグル語譯本が刊行されたことが知られており，またそのウイグル語譯本が，元廷のウイグル人佛僧プラジュナシュリー（Skt. Prajñaśrī > Uig. Piratyaširi ~ Mong. Bradir-a siri）によるモンゴル語譯本の原典となったこともほぼ確實である［松川 2004］。この『佛説北斗七星延命經』と，『玉匣記』と共通する敦煌出土ウイグル語曆占書･ハラホト出土モンゴル語曆占書は，モンゴル時代のウイグル人･モンゴル人が，中華地域の佛教・道教・民間信仰に由來する占日・吉凶についての知識を重視していたことを示す[4]。

４．テキスト・和譯・語註

Text A　　B165:3

筆者は，殘念ながら，現在に至るまで，この Text A を實見調査する機會を得ていない。所藏番號 B165:3 は，敦煌莫高窟北區第 165 窟から將來されたことを示し，現在は莫高窟敦煌研究院に所藏されているはずである。既發表の寫眞複製（DMBS III, pl. XCIII.1）から，草書體のウイグル語テキストが表裏兩面に記されており，また折り跡・綴じ跡から，本來は冊子本であり，その４頁分が殘っているものと判明する。DMBS が「正」とする面には，蓮花状の圖表とウイグル文６行が殘る。圖表の裏側の頁には草書體のウイグル文７行，その對面には14行の同じ筆跡の草書體ウイグル文が記されている[5]。DMBS によれば，紙寸は 14.4 x 18.5 cm である。

DMBS の簡報を擔當した張鐵山は，この斷片について「由于殘損嚴重，回鶻文已模糊不清，所幸蓮花状圖表内的回鶻文尚清晰可讀」として校訂案を提示した上で，「蓮花瓣内的文字都是數字，并且配列很有規律。目前尚不清楚這些數字表示甚麼内容」という［DMBS III, pp. 155, 394］。これを Abdurishid Yakup は正しく “calendar” と改めたが［語註 A1-4 參照］，原典については言及しなかった。

蓮花状の圖表は，初四日・十二日・二十日・二十八日を ₄tngri aγ [ïs](ï)「天の財物」という項目に配置している。この配置は，『玉匣記』（續道藏版，pp. 0334-0336）の「諸葛先生萬年出行圖」[6]の項に掲げられる「中元將軍所管吉凶之圖」に對應する［語註 Av4 參照］。ただし，日の配置に際して，『玉匣記』は左上欄から時計回りで日を列擧するのに對し，Text A では左下から反時計回りに配置する

---

[4] 現存するウイグル語譯『北斗七星延命經』斷片については，Elverskog 1997, p. 93 および VOHD 13,20, pp. 76-88 を參照。また，『北斗七星延命經』には 17 世紀以降に成立したモンゴル語寫本が存在する［松川 2004］。『玉匣記』も，同様に，17 世紀以降に『種々の必要のための玉の匣（Eldeb keregtü qas qaγurčaγ）』という標題を有するモンゴル語寫本が，漢文原典から多數作られた［Kara 2000, 34–37（Mong. 15）; Uspensky 1999, 471］。なお，Antoine Mostaert がオルドスで収集した曆占書寫本も，『玉匣記』と類似する部分を含んでいる［語註 A4 參照］。

[5] DMBS III, p. 155 で「背面存文字 18 行」というのは何らかの誤解であろう。

[6] 「諸葛先生萬年出行圖」は，『新增補續圖選擇萬寶玉匣記全書』（康熙甲子年＝ 1664 年刊行）や『光緒十二年新鐫增廣玉匣記通書』では「諸葛武侯選擇逐年出行圖」とされる。なお，『續道藏』卷 55 所収の『九天上聖祕傳金符經』にも，「諸葛先生萬年出行圖」として同一の圖表が含まれており，さらにこの『九天上聖祕傳金符經』自體が『玉匣記』にもそのまま載録されている［三浦 2002, p. 14］。なお，明代後期の汪淇が編纂した『士商要覽』にも，「諸葛臥龍先生定出行萬年圖」という曆占がみえるという［王振忠 2000, p. 14］。

論文31

點で，若干の相違がみられる。

さらに，蓮花状圖表の裏側の頁の草書體ウイグル文は，やはり特定の日に外出することの吉凶に關わるものであり，その點で『玉匣記』の「諸葛先生萬年出行圖」全體の内容に對應するといえる。また，ウイグル文の順序から考えれば，この頁は裏面の蓮花状圖表の直前に配置されていたことが確實であるから（從って，DMBS の「正」・「背」も，この頁については改める必要がある），「中元將軍所管吉凶之圖」ないしはこれに先行する「上元將軍所管吉凶之圖」の内容に相當するとみなすことができる。ただし，現存するウイグル文の内容は上記「上元將軍所管吉凶之圖」・「中元將軍所管吉凶之圖」とは完全には一致しない［語註 Ca0 參照］。なお，蓮花状圖表の對面およびその裏面のウイグル文は，曆占とは無關係のようであり，同一冊子のなかの離れた箇所にあったものと思われる。

以下には，曆占に關することが確實な，蓮花状圖表およびその裏側のテキストについてのみ校訂案を示す。

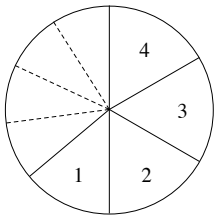
recto

r1 [ ](....)Š-T' (..)[ ] ol ·:· ·:·
r2 [ ](.....) timäk (tör)[t] (kü)n üzä yol yorïsar
r3 [ ](.....)-lär-kä (···)DW(.) aγïr älḍür qayu sïngar
r4 [ ](.....) üküš tapïšur ämgäk-siṣin aš
r5 [ ](.....) tuš ašur ö(g)[r](ü)nč sävinč-ligin yorïr ·:·
r6 [ ](.....) timäk [tört kün] (ü)zä yol yorïsar
r7 [ ] KWY(...) m-ä ölür [ ](.) bolsar nägü m-ä
r8 [ ]KW (..)[ ]M'DYN yol yorïr
r9 [ ]öglilär-ning
r10 [ ]WY(..)-LWK ay-lar
r11 [timäk tört kün](ü)zä yorïsar iš
r12 [ ](.)r saḍïγ yuluγ
r13 [t]ürlüg(?)
r14 [ ](.)(.....)[ ]

（r1）·····である。(r2)····という４つの日に道を行けば，(r3)····たちに····重いものを運ぶ。どの方向（r4）····多く逢う。苦しみなく食糧（r5）····位が増す。喜樂とともに過ごすのである。(r6)····という［４つの日］に道を行けば，(r7)····もまた死ぬ。·····となれば，何も (r8)·····せずに道を行く。(r9)·····考える者たちの (r10)·····月々 (r11)····［という４つの日］に（道を）行けば，仕事 (r12)·····商賣 (r13)·····種類の (?) (r14)·····

論文31

verso



v1	[tngri oγrïsï?]	b[i](r) yangï	toquz yangï	on yiḍi	bi(š) oḍuz
v2	[tngri qapïγï?]	iki yangï	on yangï	on säkiz	alḍï otuz
v3	[tngri ordusï?]	üč yangï	on bir	on toquz	yiḍi otuz
v4	tngri aγ[ïs](ï)	tört yangï	on iki	yägrmi	säkiz [otuz]

v1	［天盜(?)］	初一日	初九日	十七日	二十五日
v2	［天門(?)］	初二日	初十日	十八日	二十六日
v3	［天堂(?)］	初三日	十一日	十九日	二十七日
v4	天財	初四日	十二日	二十日	二十八日

Ar1: おそらく，「［これは外出に適した日の圖］である」というような，先行あるいは後續する圖表を説明する文脈に屬すると考えられる。

Ar2, timäk (tör)[t] (kü)n üzä yol yorïsar: Uig. (tör)[t]「四，４」は裏面の花瓣状圖表の内容から補う。Text C の同様の文脈では [...] atlγ kün-tä yol ünsär「‥‥という日に道に出れば」といい，用語が若干異なる。

Ar3, aγïr älḍür: あるいは，aγïr「重い，重要な（もの）」を aqïr「流れる（< v. aq-）」とみなし，「（財物が）流れ運ばれる，流失する）」と解釋すべきかもしれない。

Ar5, tuš ašur: ウイグル佛典で tuš は「位」の對譯として用いられるので［ED, p. 558; 庄垣内 2008, p. 686］，ここで「位を増す」というのは官途における昇進を示すものと考えられる。

Ar11: 破損缺落部分には，Ar2 と同じ文脈を推補する。

Ar14, saḍïγ yuluγ : 語註 Ba2-3 を參照。

Av1-3: 蓮花状圖表の中央部は破損しているが，「中元將軍所管吉凶之圖」との對應に鑑みて，tngri oγrïsï (~ tngri qaraqčïsï)「天の盜賊」(< Chin. 天盜), tngri qapïγï「天の門」(< Chin. 天門), tngri ordusï (or tngri ävi)「天の堂」(< Chin. 天堂）を補う[7]。語註 **Av4** も參照。

Av1-4, yangï: 張鐵山は，各行中の yangï を iki「２，二」と誤讀したが，すでに Abdurishid により訂正されている［Yakup 2006, p. 9, fn. 46］。

[7] Uig. qapïγ = Chin. 門および Uig. ordu = Chin. 堂の對應については，Semet 2005, pp. 123, 156 を參照。

論文31

表１　「周公圖」・『陰陽寶鑑』・『通書大全』・『玉匣記』 および Text A の比較

日　付	S.5614* S.612	『陰陽寶鑑』 『通書大全』	『玉匣記』	Text A	Mostaert 1969, p. 36
1, 9, 17, 25	天門（大吉）	天門（大吉）	天盜（凶）	（缺）	tngri-yin mör 天道
2, 10, 18, 26	天賊（凶）	天賊（凶）	天門（吉）	（缺）	tngri-yin egüden 天門
3, 11, 19, 27	天財（吉）	天財（大吉）	天堂（吉）	（缺）	tngri-yin qoriyan 天堂
4, 12, 20, 28	天陽（吉）	天陽（大吉）	天財（吉）	tngri ”X[ ](Y)	tngri-yin erdeni 天財
5, 13, 21, 29	天宮（吉）	天倉（大吉）	天賊（凶）	（缺）	tngri-yin qulaɣai 天賊 / 天盜
6, 14, 22, (30)	天陰（凶）	天集（凶）	天陽（吉）	（缺）	tngri-yin ordu 天宮
7, 15, 23	天富（吉）	天富（大吉）	天候（凶）	（缺）	tngri-yin ayul 天候 (?)
8, 16, 24	天盜（凶）	天盜（凶）	天倉（吉）	（缺）	tngri-yin sang 天倉

*S.5614 では天門・天賊・天陰の記載を書くが，余欣［2006, pp. 259-261］に従って補う。

Av4, tngri aɣ [ïs](ï): aɣ [ïs](ï)（< aɣï「財物，寶物」）の字形は明瞭ではないが，殘畫からこのように補い，漢語「天財」に對應するウイグル語表現と考える。この推補は，本斷片と『玉匣記』所収「中元將軍所管四仲月吉凶圖」との比定に際しての重要な論點なので，以下に詳述しておきたい。

本斷片の花瓣狀圖表が，ある月の日を分類して吉凶を判斷しており，また初四日のグループに「天（tngri）」で始まる名稱を與えていることは確實である。このような分類は，上述してきた『玉匣記』所収「中元將軍所管吉凶之圖」以外に，敦煌出土の漢文文書「占周公八天出行擇日」（S.5614）や「周公八天出行圖」（S.612），さらには元代の『陰陽寶鑑』や同じく元代編纂（明代重修）の『通書大全』所収の「周公八天之局」にもみられる。そこにみえる日の分類を，『玉匣記』と本稿のウイグル語斷片 Text A と比較したものが表１である。

問題となるのは，初四日・十二日・二十日・二十八日に對する名稱である。敦煌文書２件および元代の『陰陽寶鑑』・『通書大全』では，いずれも，これらの日は「天陽」の名稱を與えられている。いうまでもなく漢語の「天」はウイグル語 tngri に對應するが，管見の限り，漢語「陽」に對應するウイグル語は yaruq「光」もしくは kün「日，太陽」であり［Semet 2005, pp. 180–181; 庄垣内 2008, p. 578］，これらの語を Text A の ”X[ ](Y) という文字殘畫から想定することはできない。これに對し，『玉匣記』「中元將軍所管吉凶之圖」は，初四日・十二日・二十日・二十八日を「天財」としており，一方 Text A の殘畫 ”X[ ](Y) は aɣ[ïs](ï) = aɣïsï (< aɣï)「財物，寶物」と再構できる。ゆえに筆者は，本處を『玉匣記』の「天財」のウイグル語譯とみなして tngri aɣ[ïs](ï) と推補するものである。表１に示したように，Antoine Mostaert によりオルドス（Ordos）地域で1918/1919年に収集された近代モンゴル語曆占寫本にみえる外出日の吉凶分類にも，『玉匣記』「中元將軍所管吉凶之圖」と共通するものがみえ，特に，この初四日・十二日・二十日・二十八日を tngri-yin erdeni「天財（天の財寶）」と稱

論文31

していることも參照できる[8]。

ただし，表１に示した諸文獻のうち，Text A 以外のものは日の分類をベタ書きするのに對し，八葉の花瓣に日の分類を配置する方法は Text A にのみみられる。これも『玉匣記』が圓を八等分して配置する方法により近似するものであり，Text A の原典となった漢語の曆占文獻が『玉匣記』と近い關係にあったことを示唆する。

Text B　Peald 6e + B157:54-2

Peald 6e は，圓形の表を有する大斷片(a) と，その右側に上下逆に連貼された別の斷片(b)，また左下に同じく上下逆に連貼された極少斷片(c) の，３つの斷片からなる。連貼された状態の紙寸は 14.5 x 19.0 cm である。この斷片の寫眞は Bullitt 1989, p. 23で公刊されているが，解讀には不十分である。

この３斷片のうち，(c) 斷片のウイグル文は「‥‥家の神 ((..)n äv tngri)」というものであるが，連貼部前後の斷片(a)のウイグル文とは正しく接合しないので，本來の位置にないことは明らかである。この點に關して，荒川愼太郎氏は，この極少斷片(c)に替えて敦煌莫高窟北區第157窟出土の西夏文・ウイグル文斷片 B157:54-2（DMBS III, 圖版XII-6, XIII-4 のより小さい斷片）を接合すると，背面（本來のオモテ面）の西夏文佛典が正しく連續することを發見された。下記の校訂（a1-a2 行）に示されるように，我々のウイグル文テキストの文脈も，この置換によって正しく再構される。また，このことは，同一の西夏文佛典刊本に由來するウイグル語曆占書斷片である Text B および Texts C, D さらには Peald 6d, Peald 6f, Peald 6i が，いずれも敦煌莫高窟北區第157窟から出土したことを示唆する。荒川氏の學識に敬意を表し，ご教示に深謝の意を示すものである。

大斷片(a)の圓形の表は，やはりある月の日を分類したものであり，その内容は『玉匣記』の「諸葛先生萬年出行圖」にみえる「下元將軍所管吉凶之圖」に對應する。以下の校訂テキスト中の下線①～④は,「下元將軍所管吉凶之圖」にみえる各日の説明との比較のため, 便宜的に付したものである。

a1　①ä](d) tavar tiläsär bolur ②adgü kiši-lär-k+ä yulunur

a2　] ayïγ saqïnč-lïγ-lar ïraq tiṣär ③saḍïγ+ï yuluγ-ï

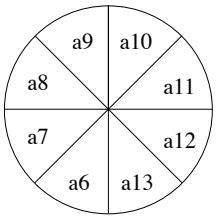
a3　ädgü (bo)lur ④oγrï qraγčï-lar-qa yul(un)maz ol ätgäli

a4　küsäsär ud ödintä üngü ol

[8] Mostaert はこのモンゴル語寫本の原典については言及していない。この問題は，『玉匣記』の内容との比定とも關連して，さらなる檢討が必要である。例えば，このモンゴル語寫本にみえる日の名稱「天の宮 (tngri-yin ordu)」が,『玉匣記』には對應するものが無いものの，敦煌文書 S.5614･S.612 の「天宮」に相當する（ただし，對應する日は異なる）ことは，曆占内容の繼受系統を考えるうえで重要となり得よう。また,「天の道 (tngri-yin mör)」は，表１所掲の諸種文獻にはみえない。本來の「天盜」を音通の「天道」と誤寫した漢語原典があり，それがモンゴル語に翻譯された可能性などを想定すべきかもしれない。

論文31

a5	üčünč ay	altïnč ay



a6	qïṣïl sɣïṣɣṅ	bir yangï	toquz yangï	yiti yägrmi	biš oḍuz
a7	aq bars bašï	iki yangï	on yangï	säkiz yägrmi	altï [oḍ]uz
a8	aq bars ʾäygüsi	üč yangï	bir yägrmi	toquz yägrmi	yiti oḍuz
a9	aq bars izi	tort yangï	iki yägrmi	yägrmi	säkiz oḍuz
a10	qar-a (y)ïlan	biš yangï	üč yägrmi	bi[r yägrmi]	[toquz oḍuz]
a11	kök (l)[uu] [bašï]	[altï yangï]	[tort yägrmi]	[iki oḍuz]	[oḍuz]
a12	kök lu[u] ʾäy[güsi]	[yiti yangï]	[biš yägrmi]	[üč oḍuz]	
a13	kök luu izi	[säkiz yangï]	[altï yä[grmi]	tört oḍuz	
a14	[toquzunč ay]		[čxšapt ay]		

---

b1	bu ïrq kim-kä kälsär sav-ïn inčä tip söz-
b2	-läti suv üzä ki kir näḍäg (...)DLW tuq-
b3	-suz ïrq-sïz ärsär amtï sävig köngül-nüng (....)(...)

‥‥‥‥‥‥（a1）①財物を求めれば，成る。②良い人たちに引き合わせられる。（a2）悪しき考えを持つ者たちは遠く離れる。③商賣は（a3）良くなる。④盗賊たちに遭うことはないのである。為そうと（a4）望むなら，牛の刻に外出すべきである。

a5	三月			六月	
a6	朱雀	初一日	初九日	十七日	二十五日
a7	白虎頭	初二日	初十日	十八日	二十六日
a8	白虎脇	初三日	十一日	十九日	二十七日
a9	白虎足	初四日	十二日	二十日	二十八日
a10	玄武	初五日	十三日	［二十］一日	［二十九日］
a11	青［龍頭］	［初六日	十四日	二十二日］	［三十日］
a12	青龍［脇］	［初七日	十五日	二十三日］	
a13	青龍足	［初八日	十六日］	二十四日	
a14	［九月			十二月］	

論文31

（b1）この占いが誰かのもとに來たるならば，その言葉（意味）はこのとおりで（b2）あった，水の上の汚れがいかほど‥‥‥しるし（b3）なく卦もないなら，今，親愛なる心の‥‥

Ba1-4: この部分は『玉匣記』「下元將軍所管吉凶之圖」の直前に對應するはずである。『續道藏』所収『玉匣記』の記載内容に従えば，「中元將軍所管吉凶之圖」の第８分類「天倉」の説明文との對應が予想されるが，その實際の内容「天倉日出行，①所求得財，出官見喜，此日用之，大吉」とは，下線部①以外は符合しない。むしろ，第４分類「天堂」の説明の方が，對應箇所が多い：「天堂日出行者，①所求順遂，萬事稱意，③買賣亨通，②貴人接引，此日大吉」。さらに，『玉匣記』で「中元將軍所管吉凶之圖」に先行して掲げられる同様の暦占「上元將軍所管吉凶之圖」にみえる「順陽」とも，共通する内容がみえる：「順陽日出行者，去處通達，爭訟有理，④不逢賊盜，①求財稱意，②好人相逢，出遇酒食，此日出行，大吉」。以上の『玉匣記』の記載内容については，語註 Ca0 も參照。

Ba1-2:「＋」は Peald 6e の大斷片 (a) と B157:54-2 との接合箇所を示す。

Ba1, adgü kiši-lär-k+ä yulunur: 語註 Ba1-4 に示した，「中元將軍所管吉凶之圖」中の「②貴人接引」との對應からは，本處の yulunur > v. yulun- は「取られる，奪われる，むしり取られる」という原義ではなく，漢文の「引」つまり「引き合わされる，紹介される」の意であろう。さらに，「上元將軍所管吉凶之圖」の「②好人相逢」との對應を想定するならば，「逢」の對譯として用いられた可能性もある。

Ba2, tişär: ~ tizär < v. tiz- ~ tez- “run away, fly, escape”［ED, p. 572］。

Ba2-3: Uig. saḍïγ-ï yuluγ-ï < saḍïγ yuluγ “(Hend.) deal, dealings, commerce”.

Ba3, oγrï qraqčï-lar-qa yul(un)maz: 本處の yul(un)maz < v. yulun- も，「（盜賊に）奪われる」ではなく「（盜賊に）遭う，引き合わせられる」と解釋しておく。語註 **Ba1-4** および **Ba1** を參照。

Ba3-4: この部分に對應する内容は，『玉匣記』「諸葛先生萬年出行圖」には見出せない。語註 Ca0 も參照。

Ba14: 圓形の表の右端は，別の斷片（b）により覆われてしまっているが，本來は「九月」と「十二月」があったことは確實である。

Ba7-14: 圓形の表には，四象すなわち朱雀・白虎・玄武・青龍が，それぞれ $_{7}$qïṣïl sγïṣγn「赤いカササギ」，$_{8\text{-}10}$aq bars「白い虎」，$_{11}$qar-a [y]ïlan「黒い蛇」，$_{12\text{-}14}$kök luu「青い龍」とウイグル語譯される。これはウイグル文「天地八陽神呪經」でも同樣である［羽田 1958, p. 80; TT VI, 150–151; 小田 2010, vol. I, 106, vol. II, 73, 154, 172］。玄武が「黒い蛇」とされるのは，玄武が亀に巻き付く蛇によって表象されるからである。なお，本處の sγïṣγan ~ s(a)γïṣγ(a)n ~ saγïzγan「カササギ」［ED, p. 818］の末尾の –XN には，それぞれ２點・１點が付されている[9]。また「下元將軍所管吉凶之圖」で白虎と青龍を細分類する「頭」,「脇」,「足」という表現は，ウイグル文ではそれぞれ $_{7,11}$bašï < baš「頭」，$_{8,12}$’äygüsi

[9] このように讀解すべきことについては，Aydar Mirkamal（新疆大學）氏のご教示を得た。特記して深謝する。

論文31

~ äy(ä)güsi < äyägü「肋骨」(ED, p. 272), $_{10,14}$izi < iz「足跡」[ED, p. 277] により對譯されている。なお, äyägü については, 西ウイグル時代のウイグル語書簡 SI 2Kr 17 にみえる $_{102}$bükün-tä mïnča bodunqa $_{104}$küč tägürsär birḍürp ʾäy(ä)güng-$_{106}$ni sïturp「今日より以降, 人々に力をふるったならば, (我々は汝を) 斬り, 汝の肋骨を砕いて (しまうぞ)」(97, 99, 101行にも同文あり) という用例を追加できる[10]。

Bb1-3: (b)斷片のウイグル文もやはり暦占・占卜に關係していることは, ïrq「占い, 卦」の語からも確實に推測できるが, 内容の上で『玉匣記』には對應する箇所を見出すことはできない。

Text C　Peald 6h

上下逆に連貼された２斷片 (a 斷片：13.5 x 12.1 cm, b 斷片：15.6 x 8.0 cm) からなり, 連貼された状態で15.6 x 19.0 cm である。a 斷片は Text B の a 斷片の直前部分に相當し, また b 斷片は Text D に後續する部分に屬する【補註】。

a1　(.) atlγ kün-tä yol ünsär ⑤ʾäd tavar tiläsär tapmaz turur
a2　⑥turuš-ta törü-süz bolur • ⑦alqu iš-lär-i büḍmäz
a3　⑧yol-ta oγrï qara γčï-lar-qa yulunup ⑨on-ta bir
a4　yanap toquz-ï ölür : iglig kämlig bolur
a5　(bu) kün arḍuq yavïz ol ·:·
a6　atlγ kün-tä yol ünsär ⑩nägü tiläsär asïγ-lïγ bolur
a7　⑪tüngür böšük iš-i büdär ⑫oγrï qaraγčï-lar-qa
a8　yulunmaz ⑬äd tavar tiläsär (.)W(⋯)-qa tapuγ bolur bu kün arḍuq ädgü
a9　kün-tä yol ünsär ⑭til aγïz bolur ⑮ïraq yir-kä barγu ol
a10　⑯äd-i tavar-ï qačïlur ⑰töduš käriš söz-i törüsüz bolur
a11　⑱(.) iš išläsär büdmäz kämür čimür bolur yavïz ol
a12　atlγ kün-tä yol ünsär ïraq barsar V(.)SWR

---

b1　kin kün-tä igläsär öngḍün sïngar aš (.)[　　]
b2　yuu šing atlγ yäk-kä tusmïš ol
b3　tngri-kä yaγïš qïlïp (birmäyük ol)
b4　[　　] bičin tngri-sin-tin

---

[10] この文言は, 西ウイグル國の刑罰について「ある人が盗みの答で捕まると, 足枷がはめられ, 手を首に縛り付けられ, 兩股を 200 回ずつ, 背中を 100 回, 棒で叩かれる。(それから) 市場を引き回され, その後, 鼻と兩耳と兩手が切り落とされ」るという, ガルディージー (Gardīzī)『歴史の飾り (*Zayn al-Aḫbār*)』(11 世紀に編纂されたペルシア語史料) の記事［森安 1991, p. 163］と, 明らかに照應する。なお, SI 2Kr 17 文書を公刊した Tugusheva は, äy(ä)güng を ay küng と誤讀している［Tugusheva 1971, pp. 176-177, 186］。また, SI 2Kr 17 文書は全體で 136 行あり, Tugusheva が公刊したのはそのうちの一部 (第 36−107 行) のみである。

論文31

（a1）‥‥という日に道に出れば，⑤財物を求めても見つからないのである。（a2）⑥もめ事では無理となる。⑦すべての仕事は遂げられない。（a3）⑧道では盗賊たちに遭い，⑨十人のうち一人は（a4）還れるが，（残りの）九人は死ぬ。病気になる。（a5）この日は大凶である。

（a6）‥‥という日に道に出れば，⑩何を求めようとも利益が生じる。

（a7）⑪婚姻のことは全うされる。⑫盗賊に（a8）遇わない。⑬財物を求めれば，‥‥への奉仕となる。この日は大吉である。

（a9）‥‥という日に道に出れば，⑭口舌（もめごと）が起こる。⑮遠い土地へ行くことになる。（a10）⑯財産は流れる（失われる）。⑰訴訟の文句は無理となる。（a11）⑱‥‥の仕事をしても全うできない。病気となり（?）皺が増える（?）（この日は）凶である。

（a12）‥‥という日に道に出れば，遠くに行っても‥‥‥‥

（b1）建という日に病気になれば，東方‥‥‥‥（b2）yuu šing という悪魔に出遭ったのである。（b3）天神に御神酒をなして與えなかったのである。（b4）‥‥‥猿の神から‥‥

Ca0: a 斷片の内容は，４つの日（a1–a5; a6–a8; a9–a11; a12）に關して，各日に外出することの吉凶を説明している。それらの日の名稱は缺落していて不明であるが，吉凶の説明は『玉匣記』所収「諸葛先生萬年出行圖」の「上元將軍所管吉凶之圖」·「中元將軍所管吉凶之圖」·「下元將軍所管吉凶之圖」の内容と，部分的に一致する。以下に，この３つの吉凶圖にみえる説明文を掲げる。

＜上元將軍所管吉凶之圖＞

①順陽日出行者，去處通達，爭訟有理，④⑫不逢賊盜，①⑩求財稱意，②好人相逢，出遇酒食，此日出行，大吉。

②堂房日出行者，神道不在宅中，①⑩求財稱意，②好人相逢，此日用之，大吉。

③金庫日出行者，車馬不成，大有失誤，⑧路逢盜賊，⑤求財不得，此日大凶。

④金堂日出行者，③吉利通達，[詞]訟有理，①⑩求財稱意，此日用之，大吉。

⑤賊盜日出行者，不利所求未遂，必主人亡，枷鎖臨身，只宜廻避此日，百事不宜用。

⑥寶倉日出行者，大人見喜，百事通達，①⑩求財稱意，衣錦還鄉，此日可用，百事大吉。

＜中元將軍所管吉凶之圖＞

①天盜日出行者，⑤求財不成，⑭口舌臨身，此日大凶，不可用之。

②天門日出行者，凡事稱心，諸事和合，去處通達，用之，大吉利。

③天堂日出行者，①所求皆遂，萬事稱意，③買賣亨通，②貴人接引，此日大吉。

④天財日出行者，①⑩求財得財，②好人相逢，凡事用之，大吉。

⑤天賊日出行者，⑤求財失落，⑥⑰見官無理，凡事不成，此日用大凶。

⑥天陽日出行者，①⑩所求得財，⑪婚姻和合，萬事稱心，此日大吉利。

論文31

⑦天侯日出行者，吉少凶多，⑭多主口舌，見血光之災，此日不宜用。

⑧天倉日出行，①⑩所求得財，出官見喜，此日用之，大吉。

＜下元將軍所管吉凶之圖＞

①朱雀日出行，⑯多主失財，⑤求財不得，⑥⑰見官無理，此日大凶。

②白虎頭日出行者，⑮只宜遠行，①⑩求財稱意，去處通達，此日大吉。

③白虎脇日出行者，①⑩求財遂心，東西任意，南北安然，此日用之吉。

④白虎足日出行者，⑤求財不利，不宜遠行，⑦⑱作事不成，此日不宜用。

⑤玄武日出行者，⑭主有口舌，⑦⑱(?)凡事不通，不可用之，凶。

⑥青龍頭日出行者，①⑩求財得利，凡出行之日，雞鳴卯時大吉。

⑦青龍脇日出行者，①⑩求財遂心，凡事稱意，此日用之，大吉。

⑧青龍足日也行者，⑤求財不利，⑥⑰見官失理，此日不宜用。

ここに掲げたように，これら３つの吉凶圖の日の説明は，互いに重複するものが少なからず見受けられる。

一方，本處 Ca1-5, Ca6-8, Ca9-11 にみえる３つの日の吉凶の説明は，上記の『玉匣記』所収の「諸葛先生萬年出行圖」で列擧される占日の説明と，完全には一致しない。特に，Ca3-4 の下線部⑨は，「出行圖」には對應するものがない［語註 Ca3-4 參照］。従って，本 Text C (a) 斷片が何らかの漢文原典の著作を翻譯したものであるとすれば，その漢文原典の内容は，現存する『玉匣記』とは異なるものであったことになる[11]。

しかしながら，上掲の Text C の校訂テキスト・和譯において下線部で示した，個々の占日の説明は，前掲の『續道藏』版『玉匣記』「諸葛先生萬年出行圖」の３つの吉凶圖と一致する内容が多い。この點は Text $Ba_{1\text{-}4}$ も共通する［語註 Ba1-4 參照］。そこで筆者は，この Text B および Text C について，『玉匣記』と全く無關係に成立したものではなく，『玉匣記』やそれに類する通書・暦占書の内容をウイグル人が理解・咀嚼した上で，各日についての説明と吉凶を適宜整理して再配列したものと推測する。

Ca2, turuš: 原義は「姿勢，態度」であるが，turuš tötüš “confrontations and quarrels; Kampf und Gemenge” という二詞一意（hendiadys）の用例［ED, p. 554; BT XXVI, p. 183］に鑑みれば，本處も「對立，口論」の意で用いられているとみてよい。語註 Ca10 も參照。

Ca3-4: 語註 Ca0 でも述べたように，本處の「十人のうち一人は還れるが，（殘りの）九人は死ぬ。病気になる」という占日は，『玉匣記』所収の「出行圖」には對應するものがない。ただし，『玉匣記』の「枯焦日」（『續道藏』p. 339）という占日には，「書曰：此日犯着是枯焦，十人得病九人消」という，本處と對應する占日記事がみえる。また，ハラホト出土モンゴル語の暦占冊子 SI G 105 にも，同

[11] 筆者が目睹し得た清代以降の『玉匣記』諸版本（脚註６參照）所収の「諸葛先生萬年出行圖」には，『續道藏』所収版と異同が少なくないが，やはり本稿 Texts B, C の占日と完全に一致するものはない。

論文31

様の占日記事がみえる：$_{78}$ede dotur-a $_{79}$qong š-a $_{80}$üdüd-tür arban $_{81}$kümün γada γarbasu $_{82}$yisün kümün qarin $_{83}$yadayu「この（暦の）中の qong š-a (?) という日に，十人の人が外出すると，（そのうち）九人は戻って來れない」。さらに，明代の日用書『五車萬寶全書』（日本宮内庁書陵部所藏本）にも「枯焦日歌。出行若遇枯焦日，十人生九人死愁」とある[12]。

Ca4, iglig kämlig: 二詞一意としての ig käm はすでに在證されている［TT VII, 38, Nr. 28$_5$; ED, 720］。

Ca7, tüngür böšük: Uig. tüngür は “a tribe (or member of a tribe) to which daughters could be given in marriage” であり，böšük はその對義語で “a tribe from which daughters are taken in marriage” の意である［TT VI, p. 163; ED, pp. 380–381, 523］。本處では，この兩者が二詞一意となって「婚姻」を意味している。

Ca9, til aγïz: Uig. til「舌；言語」と aγïz「口」は，「諸葛先生萬年出行圖」中にみえる漢語「口舌」の透寫語（calque）であり，「口論，揉め事，對立，訴訟」を意味する。現代のモンゴル語にも，同様の kelen ama “quarrel, wrangle”（< kele(n)「舌，言語」+ama(n)「口」）という表現がある。

Ca10, töḍüš käriš: やはり「訴訟，揉め事」を意味する二詞一意である。Cf. TT I, 247, Nr. 7, $_{48}$töḍüš kärištä täṣgil “Aus Kampf und Streit entflieh!”; TT VII, 38, Nr. 28, $_5$kiši bilä töḍüš käriš bolur “Man wird sich mit den Menschen streiten”.

Ca11, kämür čimür: この熟語の意味するところは不明であるが，前者の kämür を käm「病気」と，また後者の čimür を čim「皺，折り目」と關連するものとみて，全體で疾病と老化に關する文脈とみなせるかもしれない。トゥルファン出土の占術書 TT VII, Nr. 23 には $_1$äčkü süḍi birlä yunsar yuz čimsiz bolur「ヤギの乳で洗えば，顔は皺がなくなる」という文脈がある。

Cb2, yuu šing: vuu sing と讀むことも可能である。明らかに漢語の音寫であるが，原語を特定できない。

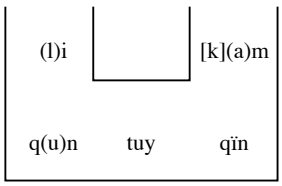
Cb3, tngri-kä yaγïš qïlïp (birmäyük ol): 末尾の「與えなかったのである (birmäyük ol)」は，糊跡のために不鮮明となっている。Cf. TT VII, p. 35, Nr. 25, $_1$tngri-gä yaγïš ayï[q] birmäyük-kä baš[in] $_2$közin aγrïtur “Dem, welcher den Göttern kein Opfer oder Gelübde dargebracht hat, machen sie den Kopf und die Augen krank”.

[12] 坂出祥伸・小川陽一編『五車萬寶全書』第２冊（中國日用類書集成９），汲古書院，2001, p. 72.

論文31

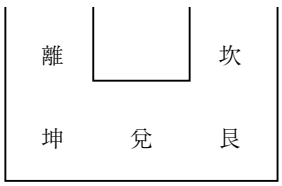
Text D　Peald 6c

15.6 x 16.0 cm。この Text D は，Text C の b 斷片に先行する部分に屬する【補註】。



1　(o)om suvasdi sidam ä(d) manggal bolzun
2　(a)mtï säkiz par qay üzä bolmïš-ïn sözlälim
3　ay uluɣ ärsär li-tin ongaru qaraɣu ol
4　ay kičig ärsär kam-tin tiḍrü qaraɣu ol

5　[　　k](ü)n-tä igläsär čomuɣ-luɣ-qa aṣu baḍïɣ-qa barm[ïš]
6　[　] ’äkä baldïz tngrim-lär-tin ög qang öṣüt-tin
7　[tï](l)daɣ-lïɣ ol • ät’öz-tä aɣu-luɣ qart baš bolur
8　(..)[　　] öṣüt-kä aš birip amita



（1）　oṃ svasti siddham! 吉祥あれかし！
（2）　いま，８つの八卦の上にあるものを説こう。
（3）　月が大きいのであれば，離から順に（時計回りに）見る。
（4）　月が小さいのであれば，坎から逆に（反時計回りに）見る。

（5）‥‥の日に病気となれば，（それは）地獄や底なし沼に墜ち［た］（6）‥‥姉妹女神たちや，父母の靈魂に（7）因縁があるのである。身體に悪性の腫瘍が生じる。（8）‥‥靈魂に食物を與えて，阿弥陀‥‥［後　缺］

D0: ウイグル文第１～４行の上方には二重線で方形が描かれており，その各邊と各頂點に記されるウイグル語は，いずれも易の八卦の音寫と考えられる。最近，寫眞が公開されたロシア・サンクトペテルブルク東洋寫本研究所所藏のウイグル語寫本 SI Kr I 1 には，以下のような八卦の音寫と，その陽（oɣul「男，息子」）・陰（qïz「女，娘」）の別が記される：☰ kin oɣul「乾・陽」; ☱ tuy qïz「兌・陰」; ☲ li qïz「離・陰」; ☳ čin oɣul「震・陽」; ☴ sun oɣul「巽・陽」; ☵ qam oɣul「坎・陽」; ☶ qïn oɣul「艮・陽」; ☷ qun qïz「坤・陰」[13]。本 Text D の八卦の音寫は，艮（> qïn）・兌（> tuy）・坤（> qun）・離（> li）は SI Kr I 1 と共通するが，坎 **k’âm*（GSR 624d）は qam ではなく $_4$K’M = kam と表記される。語註 D3-4 も參照。

D2, par qay: 漢語の「八卦」の音寫に相違ない。Chin. 八 **pwăt* > Uig. P’R = par の對應はすでに知られている［庄垣内 1987, pp. 25, 138］。卦 **kwai* (GSR 879c) > Uig. qay の例はこれまで確認されてい

[13] この比定は赤尾榮慶・高田時雄による［『シルクロード：文字を辿って』京都國立博物館，2009, p. 84］。

論文31

ないが，卦とほぼ同音の壞 *γwăi ~ kwăi (GSR 600d) がやはりウイグル字で X'Y = qay と音寫されるのも參照できる[14]。

D3-4: 本處のように，各月を大月と小月に區別し，正方形圖の各邊の中點と各角に漢字 1 字を配して日の吉凶を占う方法は，『陰陽寶鑑』·『通書大全』さらには近世以降の『玉匣記』刊本中にみえる「嫁娶周堂圖」·「納堉周堂圖」·「行嫁白虎周堂之圖」·「葬日周堂」·「除靈周堂之圖」などと共通するといえる[15]。しかし，管見では，本處のように八卦の各 1 字を配する圖は『玉匣記』には見出せない。また，本斷片では，正對する「離」と「坎」が日の計算の始點となっているのに對し，上記の『玉匣記』中の諸占圖にはそのような例はない。

D3, 4, qaraγu: < v. qara-「見る，見つめる」[ED, p. 645]。

D4, tiḍrü:「逆に，逆方向に」[ED, p. 459] とは，反時計回りのことをさす。

D5-8: 管見の『玉匣記』中には，對應箇所を見出せなかった。

D5, čomuγ-luγ-qa aṣu baḍïγ-qa barm[ïš]: Uig. v. čom-「(水に) 沈む，飛び込む」から派生した čomuγ-luγ ~ čomuγluγ は「沈むところ」[OTWF, pp. 344–349] を意味し，本處では badïγ ~ batïγ「沼，底なし沼」[OTWF, p. 183] と類義語として用いられている。兩者の間の asu ~ azu は Chin. 或に對應する [UW, pp. 324–325; 庄垣内 2008, pp. 498–499]。ウイグル文『阿毘達磨俱舍論実義疏 (*Abhidarmakośabhāṣyā-ṭīkā Tattvārthā*)』のロンドン写本 (Or. 8212-75A) には「彼の生死は諸々の衆生が沈溺する處である故 (1103ol sansar ärür 1104üčün alqu tïnlγarqa čomrulγuluq batγuluq orun < Chin. 由彼生死是諸衆生沈溺處故)」という表現がみえ，また čom- bat- ~ čomrul- bat- という二詞一意も頻出する [庄垣内 2008, pp. 514, 543]。そこで，本文書の čomuγluγ azu batïγ も「地獄や底なし沼」と解釋しておく。Cf. BT XIII, Nr. 30, 11körksüz yavïz arakšazlar-nï 12kötürüp aviš tamu-qa baturγïl "Die häßlichen, schlechten Rākṣasas erhebe und versenke in die Avīci-Hölle!".

D6, äkä baldïz: トゥルファン出土のウイグル契 SUK Em01$_{17}$, WP02$_{17}$ で，契約を遵守させるための靈的權威として言及される「七姉妹女神 (yiti äkä baldïz tärim-lär)」と關係するかもしれない。この「七姉妹女神」は，佛教的な神格と考えられている [Feng and Tenishev 1960, pp. 147–148]。

[14] 庄垣内 2003, p. 128. なお，壞のウイグル字音寫には XW'Y = quay という形式もある [庄垣内 1987, pp. 71, 145]。

[15]『陰陽寶鑑』上卷，pp.702, 709, 729;『通書大全』pp. 644, 650, 284;『光緒十二年新鐫增廣玉匣記通書』(脚註 6 參照)，卷 2, 葉 22a-22b, 卷 3, 葉 14b;『新增補續圖選擇萬寶玉匣記全書』卷 1, 27a, 27b.

論文31

略號・文獻目録

秋月 觀英 1978:『中國近世道教の形成』創文社。

APAW = *Abhandlungen der Preußischen Akademie der Wissenschaften (Phil.- Hist. Klasse)*. Berlin.

荒川 愼太郎 2011:「プリンストン大學所藏西夏文華嚴經卷七十七譯注」『アジア・アフリカ言語文化研究』81, pp. 147-305.

ATG = Annemaire von Gabain, *Alttürkische Grammatik* (3. ed.). Wiesbaden, 1974.

BT XIII = Peter Zieme, *Buddhistische Stabreimdichtungen der Uiguren*. Berlin, 1985.

BT XXIII = Peter Zieme, *Magische Texte des uigurischen Buddhismus*. Turnhout, 2005.

Bullitt, Judith Ogden. 1989: Princeton's Manuscript Fragments from Tun-Huang. *Gest Library Journal* 3-1/2, pp. 7–29.

DMBS = 彭金章・王建軍・敦煌研究院（編）『敦煌莫高窟北區石窟』文物出版社，2000–2004.

ED = Gerard Clauson, *An Etymological Dictionary of Pre-Thirteenth Century Turkish*. Oxford, 1972.

Feng, Jia-sheng 馮 家 昇 (Fen Cszja-Shen), and E. R. Tenishev. 1960: Tri novykh ujgurskikh dokumenta iz Turfana. *Problemy Vostokovedenija* 1960-3, pp. 141–149, +2 pls.

Franke, Herbert. 1990: The Taoist Elements in the Buddhist *Great Bear Sūtra (Pei-tou ching)*. *Asia Major* (3. s.) 3, pp. 75–111.

GSR = Bernhard Karlgren, *Grammata Serica Recensa*. Sotckholm, 1957.

羽田 亨 1958:「回鶻文の天地八陽神呪經」『羽田博士史學論文集』下卷，同朋舍，pp. 64–142.（初出:『東洋學報』5, 1915）

Heilkunde: Gabdul Reşid Rachmati, Zur Heilkunde der Uiguren, I–II. SPAW 1930, pp. 451–473; SPAW 1932, pp. 401–448.

Kara György. 2000: *The Mongol and Manchu Manuscripts and Blockprints in the Library of the Hungarian Academy of Sciences*. Budapest.

Lessing, Ferdinand D. 1960: *Mongolian-English Dictionary. Berkeley* / Los Angels.

松川 節 2004:「モンゴル語譯『佛説北斗七星延命經』に殘存するウイグル的要素」森安孝夫（編）『中央アジア出土文物論叢』朋友書店，pp. 85-92.

三浦 國雄 2002:「通書『玉匣記』初探」『人文學報』86, pp. 1–24.

森安 孝夫 1991:『ウイグル＝マニ教史の研究』(『大阪大學文學部紀要』31/32).

Mostaert, Antoine. 1969: *Manual of Mongolian Astrology and Divination*. Cambridge (Mass.)

小田 壽典 2010:『佛説天地八陽神呪經一卷トルコ語譯の研究』全２卷，松香堂。

OTWF = Marcel Erdal, *Old Turkic Word Formation*, I-II. Wiesbaden, 1991.

Semet, Ablet. 2005: *Lexikalische Untersuchungen zur uigurischen Xuanzang-Biographie*. Wiesbaden.

庄垣内 正弘 1987:「ウイグル文獻に導入された漢語に關する研究」『内陸アジア言語の研究』2 [1986], pp. 17-156.

庄垣内 正弘 2003:『ロシア所藏ウイグル語文獻の研究』京都大學大學院文學研究科。

庄垣内 正弘 2008:『ウイグル文アビダルマ論書の文獻學的研究』松香堂。

SPAW = *Sitzungsberichte der Preußischen Akademie der Wissenschaften (Phil.- Hist. Klasse)*. Berlin

SUK = 山田信夫『ウイグル文契約文書集成 *Sammlung uigurischer Kontrakte*』3 vols. Ed. by Juten Oda et al. Osaka, 1993.

TT I = Willi Bang, and Annemarie von Gabain, Türkische Turfan-Texte I: Bruchstücke eines Wahrsagebuches. SPAW 1929, pp. 241–268.

TT VI = Willi Bang, Annemarie von Gabain and Gabdul Rašid Rachmati, Türkische Turfan-Texte VI: Das buddhistische Sūtra *Säkiz yükmäk*. SPAW 1934, pp. 93–192.

TT VII = Gabdul Rašid Rachmati (Reşid Rahmeti Arat), Türkische Turfan-Texte VII. APAW 1936-12.

論文31

Tugusheva, Lilija Yusufzhanovna. 1971: Three Letters of Uighur Princes from the MS collection of the Leningrad Section of the Institute of Oriental Studies. *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae* 24-2, pp. 173–187.

Tugusheva, Lilija Yusufzhanovna. 2007: Fragmenty rannesrednevekovykh tjurkskikh gadatel'nykh knig iz rukopisnogo sobranija Sankt-peterburgskogo filiala Instituta vostokovedenija RAN. *Pis'mennye Pamjatniki Vostoka* 2007 (Autumn–Winter): 37–46.

『通書大全』=『類編曆法通書大全』續修四庫全書所収明刊本。

Uspensky, Vladimir. 1999: *Catalogue of the Mongolian Manuscripts and Xylographs in the St. Petersburg State University Library*. Tokyo.

UW: Klaus Röhrborn, *Uigurisches Wörterbuch*, 1-6+. Wiesbaden, 1977-1998.

VOHD 13 ,20 = Abdurishid Yakup, *Alttürkische Handschriften, Teil 12, Die uigurischen Blockdrucke der Berliner Turfansammlung, Teil 2, Apokryphen, Mahayana-Sutren, Erzählungen, Magische Texte, Kommentare und Kolophone* (Verzeichnis der Orientalischen Handschriften der Deutschland XIII,20). Stuttgart, 2008.

王 振忠 2000:「稀見清代徽州商業文書抄本十種」『華南研究資料中心通訊』20, pp. 11–14.

Yakup, Abdurishid. 2006: Uigurica from the Northern Grottoes of Dunhuang. In *Studies on Eurasian Languages: A Festschrift in Honour of Professor Masahiro Shōgaito's Retirement*, ed. "Studies on Eurasian Languages" Publishing Committee, pp. 1–41, Kyoto.

『陰陽寶鑑』=『新刊陰陽寶鑑剋擇通書』前集五卷・後集五卷，續修四庫全書所収元刊本。

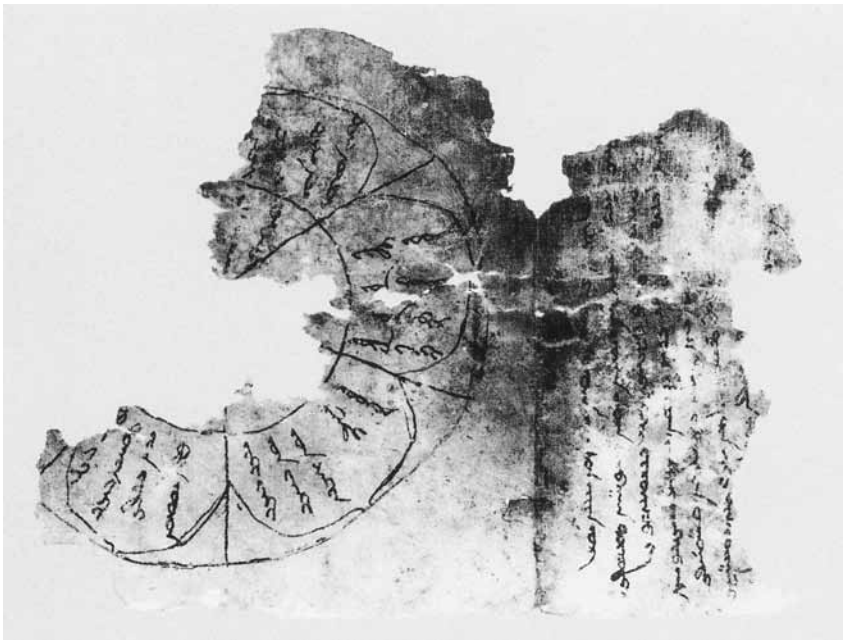
余 欣 2006:『神道人心：唐宋之際敦煌民生宗教社會史研究』中華書局。

張 鐵山 2003:「敦煌莫高窟北區出土回鶻文文獻過眼記」『敦煌研究』2003-1, pp. 94–99.

付記　本稿は科學研究費（基盤研究（A）・基盤研究（B）・基盤研究（C））による研究成果の一部である。本稿の内容の一部は，2008年度遼金西夏史研究會大會（2008年3月22日，東京外國語大學）および國際學會 Dunhuang Studies: Prospects and Problems for the Coming Second Century of Research（2009年9月3日，ロシア科學アカデミー・サンクトペテルブルク東洋文獻研究所）における報告に基づく。これらの學會の席上で有益な助言を賜った各位に感謝する。上記 2009 年の國際敦煌學會の報告論文集には，本稿の英語版が掲載される予定である。また，プリンストン大學東アジア圖書館所藏資料の調査に際して多大の便宜を圖って下さり，あわせて研究發表を許可下さった Martin Heijdra 博士に，深甚の謝意を示す。

【補註】　本稿校正中，荒川愼太郎氏より，本稿で扱うウイグル語文書斷片の本來のオモテ面であった西夏文『阿毘達磨大毘婆沙論』に關する玉稿「プリンストン大學所藏西夏文佛典斷片（Peald）について」の草稿をご恵送いただいた。荒川氏による西夏文の同定結果を援用すると，本稿Text C = Peald 6hのウイグル文al-a12 は Text B = Peald 6eの al-a14 の直前部分に相當し，また本稿 Text D = Peald 6cのウイグル文は，Peald 6i を間に夾んでText C = Peald 6hの bl-b4 へと連續するものとなる。これにより，本稿初稿時點では『玉匣記』との關連が明瞭ではなかった Peald 6iやその他のプリンストン所藏斷片資料についても，より踏み込んだ分析が可能となる。荒川氏のご好意に重ねて深謝申し上げるとともに，今後果たすべき責めとしたい。

recto



verso



Text A

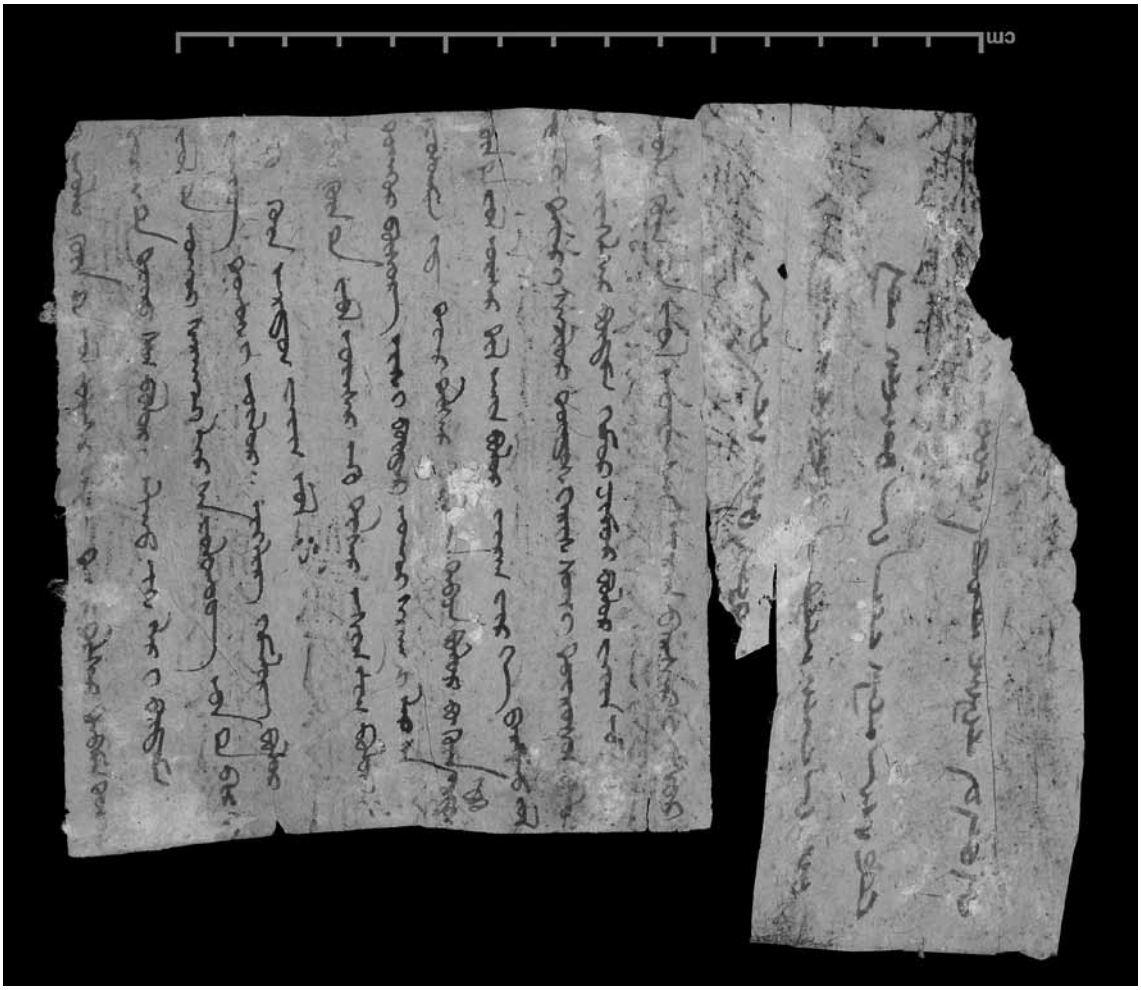
B165:3 (Dunhuang Academy: after DMBS III, pl. XCIII)

論文31



Text B [Composite Image]
Peald 6e (The East Asian Library and the Gest Collection, Princeton University)
http://idp.bl.uk/database/oo_scroll_h.a4d?uid=-185731336617;recnum=79511;index=1
B157:54-2 (Dunhuang Academy: after DMBS III, pl. XII)

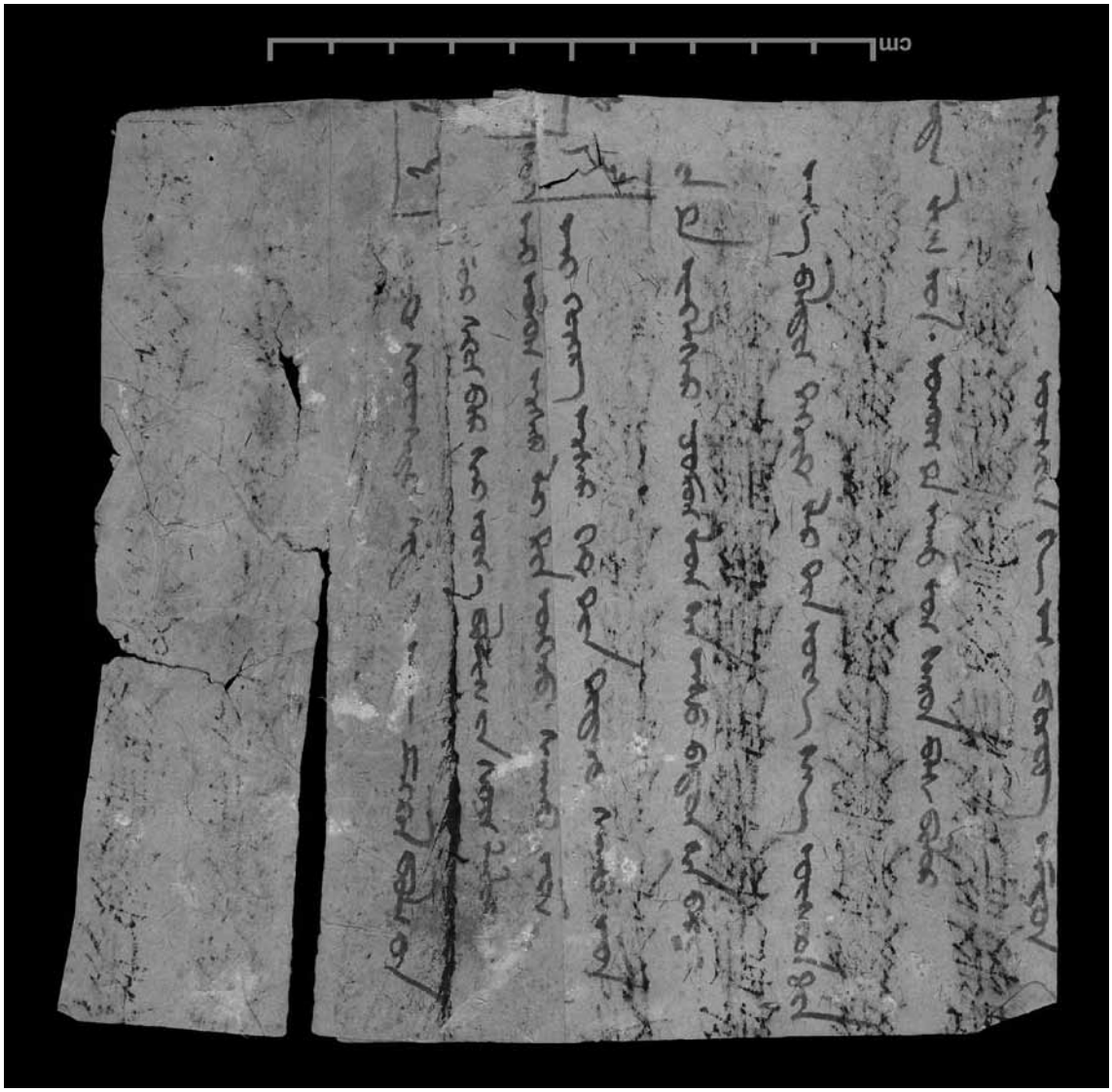
論文31



Text C

Peald 6h (The East Asian Library and the Gest Collection, Princeton University)
http://idp.bl.uk/database/oo_scroll_h.a4d?uid=-185694401515;recnum=79514;index=1

論文31



Text D

Peald 6c (The East Asian Library and the Gest Collection, Princeton University)
http://idp.bl.uk/database/oo_scroll_h.a4d?uid=-185670297315;recnum=79509;index=1

論文31

上元將軍所管吉凶之圖

正月　四月　七月　十月

孟之圖



順陽日出行去處通達爭訟有理不逢賊盜求財称意好人相逢出遇酒食此日出行大吉

堂明日出行者神道不在宅中求財称意好人相逢此日用之大吉

金庫日出行者車馬不成大有失悞路逢賊盜求財不得此日大凶

金堂日出行者吉利通達訟有理求財稱意此日用之大吉

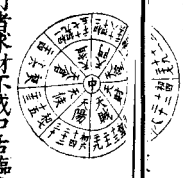
賊盜日出行者不利所求未遂必主人亡枷鎖臨身只宜迴避此日百事不宜用

實倉日出行者大人見喜百事通達求財稱意衣錦還鄉此日可用百事大吉

中元將軍所管吉凶之圖

二月　五月　八月　十一月

仲之圖



天盜日出行者求財不成口舌臨身此日大凶不可用

天門日出行者凡事稱心諸事和合去處通達用之大吉利

天堂日出行者所求皆遂萬事稱意買賣亨通貴人接引此日大吉

天財日出行求財得財好人相逢凡事用之大吉

天賊日出行者求財失落見官無理凡事不成此日用大凶

天陽日

出行者所求得財婚姻和合萬事稱心此日大吉利

天侯日

出行者吉少凶多主口舌見血光之災此日不宜用

天倉日出行所求得財出官見喜此日用之大吉

下元將軍所管吉凶之圖

三月　六月　九月　十二月

四季之圖



朱雀日出行多主失財求財不得見官無理此日大凶

白虎頭日出行者只宜遠行求財稱意去處通達此日大吉

白虎脇日出行者求財遂心東西任意南北安然此日用之吉

白虎足日出行者求財不利不宜遠行作事不成此日不宜用

玄武日出行者主有口舌凡事不通不可用之凶

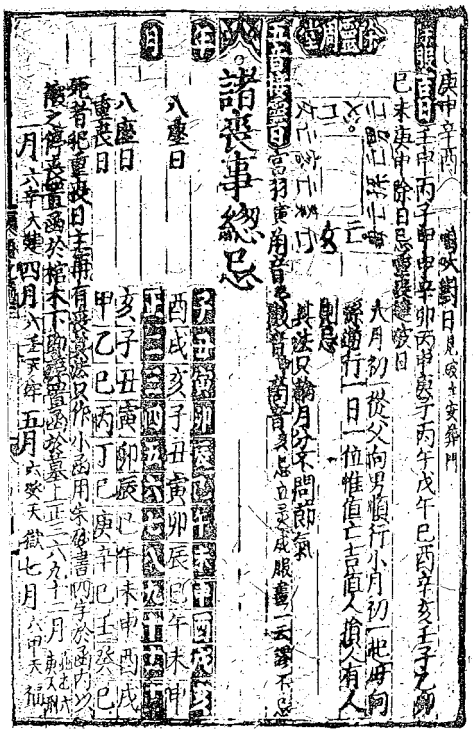
青龍頭日出行者求財得利凡出行之日雞鳴卯時大吉

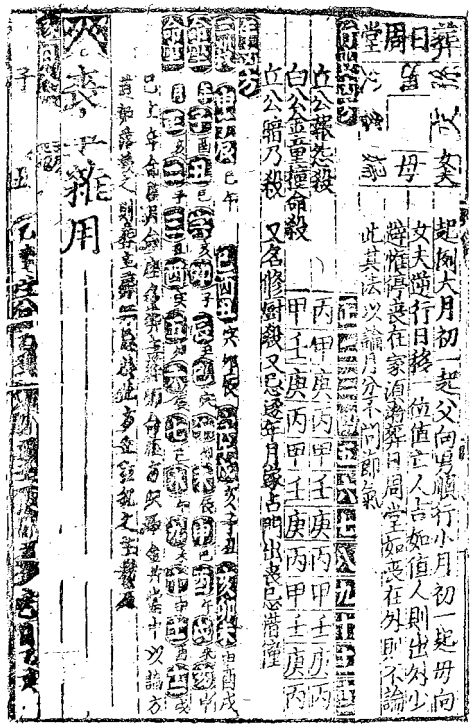
青龍脇日出行者求財遂心凡事稱意此日用之大吉

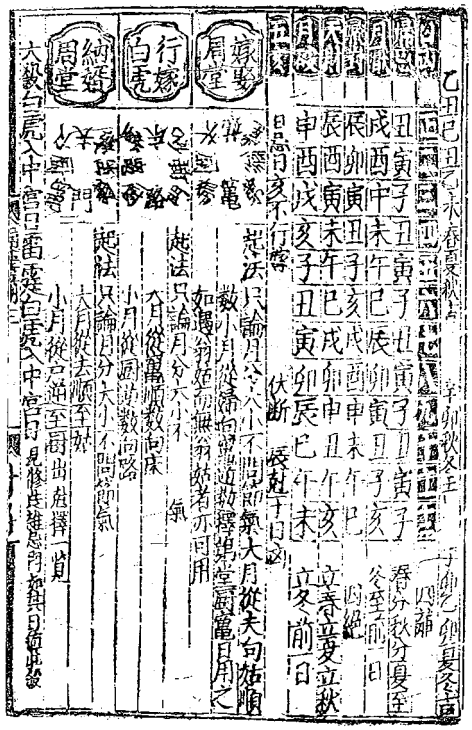
青龍足日出行者求財不利見官失理此日不宜用之

『玉匣記』（『續道藏』第 60 冊，pp. 334-336）「諸葛先生萬年出行圖」所收
上元將軍所管吉凶之圖・中元將軍所管吉凶之圖・下元將軍所管吉凶之圖

論文31







『陰陽寶鑑』「葬日周堂」・「除靈周堂」・「嫁娶周堂」・「行嫁白虎」・「納壻周堂」
（續修四庫全書所収元刊本，前集卷 3, pp. 702, 709, 729）

論文31